

データが語る希望の在り処——希望と現実に関するアンケート調査から

佐藤香（東京大学社会科学研究所 助教授）

永井暁子（東京大学社会科学研究所 助教授）

佐藤…

データが語る希望の在り処ということで、希望と現実に関するアンケート調査の結果を報告させていただきます。今回は事情がありましてこの壇上におりますのは私、佐藤香ひとりでございますが、配布いたしましたお手元の資料は永井暁子と共に作成したものです。またその作成過程では、当社研スタッフの協力も得ております。

さきほど私がこの場にあがる前に、皆さまに二十四色の色を提示いたしました（資料二ページ）が、皆さまにとつての未来の色はどれだったでしょうか？ 私どもの調査結果によりますと、概ね水色と黄色に人気があります（資料三ページ）。現在、自分に希望がある人とならない人では実は三位と四位で特色のある差が出ております。

希望があるという人の三位はオレンジ色、四位に白。希望を持っていないという人は三位が白で四位にグレーが入ってきます。どうやら希望があるのとならないのでは、未来のイメージにも違いがあるという調査の結果となりました。

さきほど玄田からの「希望学宣言！」で、私たちは希望の社会科学をしたい、ということを申し上げました。希望というつかみ所のなさそうな概念を、社会科学で捉えようとするとき、そのなかで私たちにできる手法の一つが、社会調査とそのデータを分析するということです。

そこで、これから希望に関する社会調査データの分析結果を見ていただくわけですが、ここでは特に「希望を持つている人」、私たちは今回この対象を「希望の保持者」と呼んでみましたが、この人々のデータについて分析を行ってまいります。

「職業の希望に関するアンケート調査」という名称で二〇〇五年の五月末にアンケートをとったものが、今回のデータです。インターネットを利用したWeb調査で、対象は二十代から四十代の男女、合計八七五名から回答をいただきました。回答者がどんな方々だったかを、簡単にご紹介したいと思います（資料五ページ）。

二十代、三十代、四十代と年齢層はほぼ三等分です（資料六ページ）。学歴構成は、この年代としては大学、大学院卒が多少多くなっていますが、男女比についてはほぼ半数ずつにお答えいただきました（資料七ページ）。回答者の居住地域は大都市、中市、小都市とほぼ三等分です。

調査の内容は、主に三つのことを知ろうとして設問をいたしました。一つめは、どんなことに希望を持っているのか？ という希望の方向性です。「希望」とは非常に定義が難しい抽象的な言葉です。そこでこの場合、希望がどういうものであるかはあまり厳密に提示せず、回答者の主観的な判断にお任せするという聞き方をしました。ただし「あなたはどんな希望を持っていますか？」という質問ではあまりに漠然としていますので、具体的に仕事や学習、恋愛、結婚、友人、家族、遊び、社会貢献、健康、容姿といった方向性を挙げることにしました。それらについて希望を持っていますかという形で訊ねたわけです。

そして二つめですが、大事なのはどんな人が希望を持っていて、どんな人が希望を持っていないのかを明らかにすることであろうと考えました。希望を持つ人、持たない人の特性を浮かび上がらせたいというわけです。しかし、この「どんな人が」ということを定義、想定すること自体が大変に難しいのです。そこで私たちは質問に使用しました項目の、たとえば性格についてだけでも、そのなかでさらに二十項目についてご本人の判断を伺いました。それから性別、年齢、収入、家族との関係や友人関係。他にも様々な側面がございますが、なんとか対象を捉えようと、たくさん設問をいたしました。

そして三つめでは、それぞれの人が持っている希望とは、その人の人生あるいはハピネスなどどのように関わっているのかを知りたいと思います、その関連を見るための質問項目を用意いたしました。

その最初の質問は「将来に希望はありますか」です（資料九ページ）。回答結果を見ますと、「はい」と答える方が七六・五%。「いいえ」と答える方が二三・五%。四分の三以上の方が希望を持っていると回答してくださいました。ここでもどんな希望かということは厳密に定義しておりません。ただ、将来実現して欲しいこと、実現させたいことを希望と考えて訊ねた質問です。

何に関する希望ですか、ということとは当てはまるものを幾つでもお答え下さいと質問しました（資料十ページ）。ですから、たくさん項目に丸をつける方がいらっしやるかと思つたのですが、六割ほどの過半数が二つまでの回答になっており、わりと慎ましい希望の持ち方をしている人が多いということが分かりました。

では、希望の内容はどのようなものでしょうか（資料十一ページ）。希望が一つだけという場合は、仕事に関することが一番多く三八%。次いで家族が三二%。二つにまたがっている場合は、仕事と家族が最も多く、三一%になります。二位から四位まで

のパーセンテージは、もうほとんど変わりはありませんが、二位から順に仕事と遊び、仕事と結婚、仕事と学習。このようなデータから、希望というのは仕事と家族という二つの領域に集中しているといえるでしょう。

それでは、どんな人が希望を持っているのか。希望を持っている人の特性、傾向とということを考えてみましょう（資料十二ページ）。一般に「希望を持つ人」とは、どういう人だと考えられているでしょうか？ たとえば「性格や気質に因るところが大きいのではないか」、といった感じがするのではないのでしょうか。すると、楽天的な人なのではないか？あるいは好奇心が強い人なのかもしれない。それから社会的、あるいは個人的な条件に因るところもあることでしょうか。

そういった要素を整理しますと、属性と呼ばれる年齢や性別、婚姻状況や経済状況。それから、周囲との関係といった事柄になります。たとえば親子関係で、親に愛されて育ったのか。あるいは現在友達が多い人なのか。そういった事柄の影響も考えられます。

そして経験からの影響もあるかもしれません。たとえば自分の希望は何でも叶えてきた、いわゆる勝ち組と呼ばれる成功者の方が希望を持っているのか、あるいは逆なのか。そういった条件がいろいろ考えられ、それぞれを見ていく必要があります。ただ、こういった条件群を一括りに考えても混乱してしまいます。ある程度、方向性を明確にしなければ分析はなかなか上手くいかないのです。

そこで、いわゆる環境から個人に与えられる影響は二つに分けて考えましょう。性格や気質に因るもの、そして社会的・経済的な要因、まずは大きくこの二つに分別します。そしてそれぞれが、希望の保持⇨希望を持つか、あるいは持たないかにどのように影響していくかを見るといふ分析をいたしました。

分析をするまでもなく当然のように思われることでも、その「当然」を確認するのもデータ分析の重要な仕事です。まず、性格や気質との関連性を統計的に見てみると、はつきりと優位な関連性が認められました。

性格や気質についての関連性では、先ほども申しあげたように二十項目の質問をしています。独立心が強いとか、チャレンジ精神があるとか、資料十四ページ目にあがってきた項目が、六つございますが、実は二十項目のうちの六項目のみが統計的に関連性がある、ということが分かったわけです。

この資料は、「はい」と答えるほど希望を持つ傾向が強いということをあらわす表です。たとえば独立心の強い人ほど希望があるわけです。続いてチャレンジ精神がある、

好奇心が強い、地道にするのは苦手、というこれら上位四つ項目に「はい」と答える人は希望を持つ傾向が強い。逆に「いいえ」と答えるほど希望を持つ傾向が強い項目もありました。優柔不断だ、いい加減だ、という項目には「いいえ」と答える人ほど希望を持つ人が多かったのです。当初の予測では関わりがあると思われる、楽天的ということには相関性がありませんでした。

もう一つの社会的・経済的な要因の影響も見てみましょう。もちろん社会的・経済的要因と希望の間にも統計的な関連性がありました。質問の項目は、属性や周囲との関係、それから経験というように分けました。

具体的にどんなことをお訊ねしたかというところ、一つめの「属性」については年齢、性別、婚姻、収入。二つめの「家族状況」については、中学三年生時代のご家庭の経済状況は豊かでしたか？ 家族から愛情を注がれてお育ちですか？ そして期待されてきましたか？ 三つめの「職業志向」については、子どもの頃になりたい職業はありましたか？ また、実際に働いたことはありますか？ 四つめの「社会的ネットワーク」については、友達が多い方ですか？ という質問です。そして五つめの「挫折経験の有無」では挫折したことはありますか？

こういった質問項目について分析をいたしました。資料十五ページ目で四角い囲みのある項目は統計的な関連性があると分かった項目で、それ以外には関連性が認められませんでした。

関連のあった項目として残っているのは、属性では「年齢」。家族状況では「家族の期待」。職業志向では「子どもの頃の職業希望の有無」。社会的ネットワークでは「友達の数」。そして「挫折経験」です。

それぞれの傾向を見ていきましょう。まず年齢はシンプルな結果で、若い人ほど希望を持つ傾向があります。次は、家族との関係。資料十七ページで「家族から期待されていた」という一番上の項目と、「期待されていなかった」という一番下の項目では、二十ポイント以上もの差があります。つまり希望を持つ傾向は、家族から期待されていた人の方が強い、ということになります。では友達の数はどうかというところ、これもやはり友達が多いという人の方が希望を持つ傾向にあります（資料十八ページ）。友達が多いという人と、少ないと回答した人では、十ポイント以上の差があります。

続いて職業志向を見てみましょう。職業志向で関連性があったのは子どもの頃、希望する職業があったかどうかということでした。小学校三年生、中学校三年生と二段階に分けて調査してみました。が、どちらも同じ傾向です（資料十九ページ）。希望する

職業があつたと答える人の方が、希望を持つ傾向が明らかに高くなっています。最後にもう一つ、本人の経験との関連です。「挫折したことがある」と回答した人の方が、挫折したことのない人より十ポイント以上の差をもつて、現在は希望を持つ傾向にあることが明らかになりました(資料二十ページ)。

さて、性格・気質と社会・経済的な要因という、この二つの側面から希望があるのはどんな人かということを見てきましたが、それらをまとめると以下のような傾向が浮かび上がってきました。性格や気質という面では、独立心が強く、チャレンジ精神がある、好奇心が強い、地道にこつこつするのが苦手な人。こんな人はどうやら、そうではない人より希望を持つ傾向が強いです。

それから、社会・経済的要因の面から見ると、若い、子どもの頃家族から期待されていた、友達が多い。また、子どもの頃に希望する職業があつた、挫折を経験している。こういった条件を持つている人が希望を持つ傾向が強い。

ところで「何が関係なかったか」ということも、実は重要な情報です。性別も、結婚しているかどうか、子どもの頃の経済状態も、希望の保持には関係がないということが分かりました。楽天的だと自分で思っている人が特に希望を持つわけでもありませんし、現在収入があるから希望を持てる、というわけでもないことが明らかになりました。

これまでのデータから、どんなことに希望を持っているか、一位は仕事で二位が家族ということ。それからどんな人が希望を持っているかについて見ていただきました。こうしたことから浮かび上がってきたのは、希望と仕事にはどうやら深い関わりがあるらしいということです。

仕事の中に希望を見出すこと、そして子どもの頃に希望する職業があつた人の方が希望を持つていること。この二つを考え合わせると、では「希望の職業に就くこと」が大切なことなのか? という疑問が浮かんできます。かつて希望した職業に就いたか就かないかを見てみると、本当に希望の職業に就けた人はほんの少数派です。希望の仕事に就けたか就けないか、そのところをどう評価するのかが問題ですが、そのためにはまず、子どもの頃にどんな職業を希望していたかを見る必要があります。

そこで小学校六年生の頃に希望していた職業を、男子女子別に見てみると、男子の一位はトラック・電車の運転手、パイロットなど、乗り物の運転手さんです。二位はスポーツ選手。三位は警察官、消防官、自衛官。女子の場合は一位が幼稚園の先生や保育士。二位は小学校、中学校、高校の教師。三位は小説家、作家、漫画家となつて

います。現実から遊離した夢の部分も多く感じられ、実際はこういった希望の職業になかなか就かないということに納得できるようなところもあります。

中学校三年生の頃になりますと、同じように一位から三位を見ましてもやや現実的になってきます。男子の一位は、機械・電気や建築・土木関係の技術者。二位はSE（システム・エンジニア）、コンピュータのプログラマーがあがってきます。それでも三位はスポーツ選手なのですが。女子は一位が薬剤師、栄養士、看護師、臨床検査技師、とかなり現実的になってきます。二位は小学校、中学校、高校の教師で、三位の小説家、作家、漫画家は小学校時代と変わりがありません。

成長すると共に希望する職業も変化しており、より現実的になってくるわけです。そして実際にどうなったか。小学校六年生の頃の希望職業についたことのある人は、八%。中学三年の頃の希望職業に就いたことがある人は、一五%。ほとんどの人が希望する職業には就いていません。ただ、希望職業に就けないからといって、子どもの頃になりたい仕事の希望を持つことが無意味なのかというと、希望の保持という点から見て、多分違うであろうということが伺われます。

資料二十六ページのグラフは小学校六年生の時点で希望していた職業に就いたことがあるかないかと、現在希望を持っていることとの比率を示したものです。一番上は希望職の経験がある人。この人たちは本当に少数派ですけれども、その九一%が現在希望を持っています。希望職は持っていたけれど、実際に経験はしていないという人では七九%が希望を持っています。そして希望職がなかったという人が希望を持っているパーセンテージは六三%です。

最初にご紹介したように、全体では七六・五%の方が希望を持っており、これが全体の平均なわけです。それが、子どもの頃に希望の職業を持っていなかったという人は、現在希望を持つということに、平均よりかなり下回っているわけです。希望職に就いたことがあるという少数派に着目する必要があります。しかしそれよりも大切なのは、かつて希望を持っていたかどうかであり、その違いが明確だということ。これが大事な情報なのです。

これまで見てきたことを振り返りますと、現在希望を持つ傾向というのは資料二十七ページのとおり、以下の順で強くなっていることが分かります。希望を持つ傾向が最も弱いのは、子どもの頃に希望する職業がなかった人たち。次に、希望する職業には就けなかったが、希望はしていたという人。一番希望を持つ傾向が強いののが、かつて希望していた職業に就いたことがあるという人。しかし繰り返しになります、

たとえ希望の職業に就かなくとも、かつて希望があったということは、現在希望を持つことに繋がるという意味で重要だということになります。

ここまでの分析から分かったことを、まとめておきたいと思います。まず最初に、どんな希望を持っているかという点から見ると一ついえることは、希望の生成の場として「仕事」が最も重要であること。二つめやはり仕事と関連しますが、先ほどの資料（資料二十七ページ）によるとおり、希望が達成されるということもむしろ重要ですが、「希望を持つこと」自体に意味があるという可能性が伺われることです。三つめは、どんな人が希望を持っているかという項目で明らかになった、「挫折の経験」が希望に繋がっているということです。最後の四つめですが、友達や家族という周囲の存在が重要な役割を果たす、という可能性についても分かってきました。

こうした主に四つの点が、今回のデータとその分析から浮かび上がりました。また、それと同時に新しい課題も浮上してきたのです。希望の生成の場、あるいは希望との関連性として仕事という要素が非常に重要だということは分かりましたが、それがなぜなのか？ そして仕事と希望はどのように関わっているのか、そのメカニズムとは？ 希望と結びつくメカニズムについてはもちろんこれから研究を続けて参りますが、仕事以外の場所、あるいは職業以外の場所で、希望は生成しないのだろうか？ 生成するとしたら、どこで生成するのか？ そういったことを明らかにする必要があります。そういう意味で、今後の課題はまず「職業以外の希望生成の場、そしてその可能性を探る」ということになるでしょう。

二つめは「挫折と希望がどんな関係にあるのか？」ということ。希望を持っていて、それが挫折し、そこから挑戦して新たな希望に繋がるという単純な直線のパターンなのか、それとも変更や決意、選択などといったより複雑なメカニズムが関わっているのか？ そして挫折したときに希望を持つのを止めてしまう人と、持ち続ける人というのはどこでどのような理由で分岐するのか？ このことを「希望を保持するメカニズム」と短く表現させていただきますが、こうした関連性、メカニズムを明らかにする必要がありますと私たちは考えております。これらの二つの課題を明らかにし、さらに仕事と希望の関係についての研究を深めていくために、二〇〇五年の秋にはまた社会調査を計画しております。

本日の報告では、特に四つの発見ということを申し上げました。しかし実は発見というよりも、調査に回答してくださった方々が私たちに教えてくださった、という方がびつたりとした表現かもしれません。データというのは常に回答者の方々のご協力

がなければ調査ができませんし、私たちはデータから教えていただいている、というのが分析の実情なのです。ですからこの調査に協力をして下さった方は、今この場にはいらつしやらないかもしれませんが、この場を借りて回答者の方々にお礼を申し上げます。

今後また希望学の調査を続け、研究を継続いたしますので、ご理解とご協力をお願いしたいと思います。社会科学研究所の重要な仕事の中に、社会調査とそれに関連した仕事がございます。希望学のみならず様々な社会調査が行われているわけですが、それら全般の社会調査についてもご理解いただき、また興味を持っていただいで、合わせて希望学の発展にもぜひご協力をいただきたいと思いますと思っております。